

優秀賞

進みながら強くなれ

―手術の「壁」を超えて―

青山学院中等部2年 座間 耀永

ピツピツピツ。冷たい電子音。真つ白く高い天井。管という管でつながれている。激痛。看護婦と医師が走り回る。動けず声も出ず、私は心で絶叫していた。「死にたい。手術なんてしなきゃよかった!」

数年前、私は骨が湾曲する病気を宣言された。発見後、急速に悪化し、手術が決まった。しかし、主治医の説明に全く納得ができず反発。主治医も患者との合意が得られない場合は執刀不可、と延期になった。私にとつて手術は大きな「壁」だった。なぜなら首から腰までぎっくり切れられ、金属という金属で背中を固定される過程で一度筋肉を剥がしてから貼り直しをするのだ。背中にはくつきりと傷跡が残る。だが、一刻の猶予も無いと、主治医が交替する形で手術を急ぐことになった。納得はしていなかった。だがこの「壁」を超えないと命の危険が迫っていると諭された。先生が私の肩に手をおいて「大丈夫だよ」と言った。その一言に私は大泣きをした。だが術後は、地獄だった。何本もの管から数時間おきに四種類の麻酔が身体を巡っても激痛が収まらない。ICUを出てすぐリハビリ開始。寝返りだつて激痛なのに、歩かなくてはいけなく死ぬほど辛い思いをした。死んだ方がマシだと泣き叫んで看護婦さんと両親を困らせる日々。シャワーを浴びるのも介助が必要だ。一人でトイレも行けない。惨めな姿だった。しかしその時、母に言われて、尊敬する先生が腎臓癌の手術をしたことを思い出した。リハビリが激痛だった時、正岡子規が、「平気。平気」と唱え自身の病氣と闘ったことに励まされたと仰っていた。私も負けてはいられない。平気平気、と自分に言い聞かせた。しかし、歩行器で歩く廊下は長い。辛い毎日。だが徐々に距離が増えて気持ちちが上を向いてきた。退院を早めても良いと聞いた時、「壁」は遠く後ろにあった。人生に数多くの壁は立つ。が、必ず超えてみせる。もう立ち止まるな、私。進みながら強くなれ、自分。